

# 実践報告 非識字者への平仮名指導

内藤 臨

## 1. はじめに

非識字者とは、「読み書きができず、日常生活に関係ある事実についての短い簡単な文章も理解できない者」である。中国では識字運動により識字率はあがっているが、中国帰国者定着促進センター（以下「センター」とする）に入所する学習者の中にも、ほぼ毎期非識字者が含まれている。センターでは入所直後に行なうプレースメントテスト<sup>1)</sup>で、中国語の読み書きができないと申告した学習者に対し、中国語の識字力テストを実施している。一定の点数以下の学習者を「非識字者」とみなし、指導にあたる。一般にいわれている非識字者より狭義である。

本稿でとりあげる非識字とは、第二言語の非識字ではなく学習者の母語の非識字、つまり、多くの帰国者の母語である中国語での非識字である。母語で非識字者である場合、第二言語の学習において、識字者の学習者にくらべ困難が多い。「非識字者」は、中国におけるこれまでの生活で、文字が読めないゆえ、金融機関の利用や交通機関の利用等の社会生活の経験に乏しいことが多い。また、社会経験に乏しいがため、文字との接触の機会が少なくなっている。そのため、センターにおいて日本の生活・習慣を学習する場合でも、識字者である学習者よりも事情の理解が遅かったり、理解できなかつたりすることもある<sup>2)</sup>。また、「非識字者」の多くは就学の経験がない。そのため、学習技術をもっていないことが多く、勉強の仕方も練習する必要がある。文字学習においては、他のタイプの学習者と同じ方法で文字指導をすると、習得がかなり困難である。5～6年の就学経験がある学習者とくらべると、文字の習得の速さや習得率にかなり違いがみられる。

しかし、文字を習得することは社会生活上のさまざまな便宜をもたらす。名前が書ければ銀行や役所での手続き等も可能になってくるし、電車の切符の料金表が見られ、駅名の看板が読めれば自分で電車に乗れるようにな

る。また、一定期間の研修の後は生活の中で自分で日本語を学んでいかなければならないが、生活の中で耳にしたことばを文字を使ってメモをする等文字を記憶の手段とした自習が可能にもなる。さらに、勉強したくてもその機会がなかった学習者では、文字を学べるといふ喜びや文字を習得したという自信が生まれ、次の学習への意欲へとつながる場合もある。

これまでセンターでは、さまざまな方法で「非識字者」への平仮名指導を試みてきた。本稿では、「非識字者」への平仮名指導について、これまでの指導方法と現段階での指導方法を報告する。なお、「非識字者」の中にも幼少期に使っていた日本語や文字をいくらか覚えており、簡単な会話ができる学習者もいる<sup>3)</sup>が、ここでは例外としてとりあげないことにする。

## 2. これまでの指導方法

### (1) 50音順

識字者である他の学習者と同じ方法で、50音順に、あ行から順に行ごとに単音で発音練習、書き練習をしていた。覚えられず、あきらめる学習者がでていた。

### (2) 書きやすい文字順

まず、単語を絵カードを使って音で導入する。その単語を覚えてからその単語の音を手がかりにして、平仮名の読み、書きの練習をした。

例： いすの絵のカードを使い、「いす」と音で覚える。

「い」は「いす」の「い」と覚え、読み、書きの練習をする。

単語は日常生活でよく使う単語を用いた。文字は音順にはこだわらず、画数が少なくて書きやすい文字（例えば、「つ」、「く」、「い」）から始めた。その結果、覚えやすくなった。

### 3. 現段階の指導方法

2 (2)の方法と同じ様に、単語を覚えたあとその音を手がかりにして、平仮名の読み書きの練習をする。練習の手順は2方法試みられている。ひとつは、単語をシソーラス(分野別語彙)で分けて覚え、覚えた単語の順にその単語の(原則として)語頭の平仮名を覚えていく方法である。もうひとつは、覚える文字が(原則として)語頭にある単語を音順にあ行からまず覚える。そのあと、平仮名を50音順に覚えていく方法である。以下に2方法を紹介する。

#### (1) 単語シソーラス順

##### 1) プログラム(表1参照)

単語をシソーラスで分けて覚え、覚えた単語の順に(原則として)その単語の語頭にある平仮名を覚えていく。単語は語練習する。例えば、くだものの単語の「みかん」、「りんご」、「すいか」、「もも」を初めに覚えたら、平仮名は、「み」、「り」、「す」、「も」の順で覚えていく。

音順ではない。清音の練習が一通り終わってから、復習のため、今度は音順に濁音も加えて練習する。時間の関係で拗音はとりあげることはできない。覚えた単語はあまり時間をおかずに「話題」<sup>4)</sup>の授業で使っていく。「話題」の授業で使うことで単語の定着もよくなる。この方法で、単語の記憶、文字練習、「話題」の総合学習ができるようになっている。

##### 2) 教材

###### 単語のプリント(図1)

1ページに5~6の単語の絵がかいてある。文字の練習でも「話題」の授業でも使いやすいように考慮してつくってある。

###### 絵入りの平仮名 音表(図3参照)

###### 文字練習用シート

文字の横に対応する単語の絵がはいっている。

の読み練習のテープ(単語の意味も中国語で入れてある)

###### 単語聞き分け宿題用テープとシート

平仮名单音聞き分け宿題用テープとシート

表1 16週プログラム

	シソーラス順			50音順				
初期	単語の練習 88語	ひらがなの練習 清音	「話題」 (週1時間程度)	単語の練習 96語	ひらがなの練習 清音 50音順	「話題」 (週1時間程度)		
中期								清音・濁音 50音順
後期		拗音						

### 3) 使用する単語について

使用する単語は、学習者のタイプにあったものを選んでいく。指導者側からみると覚えやすいように思えても学習者のもつ生活背景により不適切なものもあるので、使用する単語を決めるときの留意点を以下のように定めた。

語頭に50音がくること。

例：「い」を覚えるための単語の場合 いす ×かい

身近なもので、生活の中で使え、かつ具体的なものであること。

学習者の中国での生活の範囲内であることが望ましい。見たことがないもの（例：いちご）、抽象的なもの（例：るす）は避ける。

2 または3音節<sup>5)</sup>であること。

1音節は印象が薄く、4音節以上だと長くて覚えられない。

その単語の中国語の音と似ていないこと。

例：「そ」の単語を「そうじ」とすると、「そうじ」と中国語の掃除の意味の「扫地」[sao di]の発音がやや似ているため「そ」に[sao]の音を当ててしまい、「そ」の発音が[sao]になる。

「話題」の授業で使いやすいものであること。

### 4) 授業例

単語の記憶、文字の練習とも授業時間の最初の 分間を使って行なう。単語や文字の練習だけに1時間を使うことはない。

単語の記憶

2)の教材 のテープは学習が始まったらすぐに渡し、家でひまなときは流しておくように指導する。

1分野(5~6単語)ずつ導入する。

・クラスでの練習(1日3回程度)

a 中国語で単語の意味の確認

b リピート練習

c 聞きわけ練習

・宿題

テープとシートを使って5つの単語の聞き分け練習

平仮名の練習

当該文字の単語を記憶してから始める。

・クラスでの練習

1日2文字、1週で8文字程度。

1回につき1文字のみである。

「         」の形で提示         例：「みかん」の「み」

発音練習

既習の文字を混ぜて4文字程度で聞き分け練習

書き練習

・宿題

4文字の練習が終わってから宿題を出す。

テープとシートを使って4文字（単音）の聞き分け練習

(2) 音順

1) プログラム(表1参照)

文字の練習を主目的にしている。覚える文字が(原則として)語頭にある単語を50音順に各行からまず覚える。そのあと、平仮名を50音順に覚えていく方法である。(1)の方法とくらべると、覚えた文字を50音順に並び換える手間がないので、拗音までできる。単語はシソーラスではないので、「話題」の授業ですぐ使うことはできない。

2) 教材

平仮名の教科書(図2)

1ページに1行分、平仮名と絵がペアで書かれている。絵を見ると平仮名の発音が思い出せるようになっている。

絵入りの平仮名50音表(図3)

文字練習用シート

文字の横に対応する単語の絵がはいっている。

の読み練習のテープ(単語の意味も中国語で入れてある)

単語聞き分け宿題用テープとシート（図４）

平仮名単音聞き分け宿題用テープとシート（図５）

### 3) 授業例

単語の練習

(1)、3)に同じ

平仮名の練習

当該行の単語5つを記憶してから始める。

・クラスでの練習

a 5文字の提示

の の形で

b 5文字の発音練習

各段の口の形を意識させて練習する。

c 5文字の聞き分け練習

d 書き練習

文字の音が入ってから、一回につき1～2文字ずつ練習する。

・宿題

5文字の書き練習が終わってから宿題を出す。

テープとシートを使って5文字（単音）の聞き分け練習

### 4. 実践結果

上述3、(1)、(2)の方法の実践結果を報告する。

#### (1) 単語シソーラス順

94年度には8名がこの方法で練習した。この期は識字力を考えると文字が覚えにくいことが予想されたので、3、(1)で紹介した方法に加えて、既習の文字を使った単語の表をつくり、毎日読みの練習をした。また、単音での読み練習も繰り返し行なった。練習の結果を表2にまとめた。

表2 学習者の背景と単語シソーラス順の指導結果

学習者	A	B	C	D	E	F	G	H
年齢(才)	5 7	5 5	5 3	5 3	6 7	5 1	5 3	5 4
中国での学歴	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
識字力テストの結果 (40点満点)	1点	6	4	2 5	0	0	0	1 1
平仮名学習終了時のテスト結果	3文字読めなかった	すらすら読めた	すらすら読めた	2文字読めなかった	12文字読めなかった	5文字のみ読めた	5文字読めなかった	4文字読めなかった

50音表を順に読んでいくテスト。期末のテストになる。

Gさんは、中国で就学の経験はない。ずっと主婦で家におり仕事はしていなかった。センターでの識字力テストでは一単語も読めなかった。自分の名前を書くこともできなかった。初めは文字学習に戸惑いもあったようだが、大変意欲的に取り組んでいた。清音の一回目の練習のときは単語と文字を切り離さず、文字がわからないときはすぐ単語を見るように指導した。この方法では覚える単語の数が多いので、語くらいまでは比較的順調だが、その後忘れるものもでてきて、語くらいになると覚えられなくなってくる。Gさんは単語の学習より文字の学習に意欲的だったので、練習した単語の中でも文字学習で使う単語はよく覚えていた。清音の練習が終わった時点で読みのテストをしたところ、単語(の絵)を見れば文字も読めるようになっていた。音順での復習のときは文字を意識させ、なるべく単語と文字を切り離すようにした。この復習が終わってから音表を用いてテストした結果、読めないのは1文字だけだった。「て」を「け」と読み間違えた。「き」、「は」、「ひ」、「り」の発音はあいまいだった。「き」は「ち」、「は」は「あ」、「ひ」は「し」、「り」は「りん」に近い音で読んだ。同じ段での混同である。「り」を「りん」と読んだのは、「り」を覚えるときの単語が「りんご」で、「り」の発音に「りん」をあててしまったためである。「き」と「ひ」は他の学習者も同じように読んでおり、正確に発音できない傾向がある。「き」は北部中国語に近い音のない音韻であり、「は」は中国語の[ ]より調音位置が前寄りであり、発音が弱い中国語話者には子音として意識されにくいことから、発音が

難しい。

単語シソーラス順と 音順と同じ文字を2回ずつ練習したため、定着はよかった。

## (2) 音順

(1)とは別の期に2名、さらに別の期に2名がこの方法で練習した。その結果を表3にまとめた。学習終了時のテストは清音が終わった時点、つまり期の中間のテストで、(1)よりかなり早い時期のテストである。そのため絵をヒントにしてもよいという条件つきとした。

表3 学習者の背景と 順の指導結果

学習者	I	J	K	L
年齢(才)	40	33	36	35
中国での学歴	小1	小3	小6	小5
識字力テストの結果 40点満点	11	10	24	21
平仮名学習終了時のテスト 結果	読めた	読めた	4文字読 めなかつ た	5文字読 めなかつ た

単語の絵もヒントにして 文字を読むテスト

Lさんは、中国では小学校5年までいっているが、学齢期が文化大革命のため識字力は低く、センターでの識字力テストでは40単語中21単語しか読めなかった。中国で仕事にはついていなかった。初めは文字学習に慣れず、あ行は覚えたが、か、さ行の練習が始まるとよく間違えた。た行の練習が始まったころ文字学習にも慣れてきて、今度は逆に覚えられるようになってきた。清音の練習が終わったところで各行ごと5文字の聞き分けのテストをしたところ、全体で5文字できなかつた。この5文字は「か」

「く」「こ」「は」「ほ」だった。か行とは行は中国語に似た音がないものがあり、正確に発音できなかつたり覚えられなかつたりする学習者が多い。

Ｊさんも、学齢期が文化大革命中のためか識字力は低かった。しかし、文字練習は順調だった。清音終了時のテストでは問題なく読めた。発音も比較的正確だった。

Ｊさんの義母は残留婦人で、このクラスの担当者の話では、子供や孫が家庭で学習するときよく手伝うようである。生活の中でも子供が習った日本語は努めて使う様にしているようである。Ｊさんの発音が比較的正確なものも、家庭でも日本語が母語である義母の発音を聞けるためであると考えられる。また、Ｌさんも義母が残留婦人であるが、この家庭の場合、残留婦人は練習を特に手伝っていなかった。残留婦人の家庭の場合、残留婦人の、子や孫の学習への関わり方はその学習に大いに関係するようである。

この方法で練習した学習者は、( 1 )の方法にくらべそれほどの負担もなく平仮名を覚えた。この方法は、覚えるべき単語も少なく済む。また、各段の口の形も初めから意識させて練習することができる。各期により学習者の背景は異なるので一概には言えないが、文字学習のみ考えた場合、この方法は学習者の負担が少なく、覚えやすいようである。

## 5 . おわりに 今後の課題

ここでは文字習得までの指導例を報告したが、文字を習得してから実際に使っていくことがさらに大切である。学習したものを使うことにより文字の便利さを知ることができ、それがまた文字を学習することの動機となり、文字学習への意欲につながるだろう。しかし、文字をその後の学習や生活の中で使えるものようにするためには、「非識字者」は学習技術をもっていないことが多いので、まず、学習場面での使い方や実際の生活場面での使い方も細かく練習する必要がある。センターでは、平仮名練習が一通り終えてから平仮名を使って単語帳をつくる等の活動を組んでいる。今後、平仮名習得後の、文字の用い方の練習のプログラムの充実が課題である。

また、ここでは文字学習をとりあげたが、識字に関してその他、「非識字者」の場合、算用数字やアナログの時計、カレンダーが読めないことが多い。中国での生活で使っていなかったためである。これらができないのに、日本語で数字の読み方を練習したり、曜日の言い方を練習したりするのは無意味である。算用数字の意味やカレンダーの見方を習得してから練習しなければならない。これらの練習のためには可能ならば中国語を使ったほうが効率がよい。

#### 注

- 1) 「一定」、「地方」等中国語で使用頻度の高い40の単語の読みのテスト
- 2) 児玉・内藤(1995)「非識字者を含むセンター修了生家庭への訪問調査報告」『中国帰国者定着促進センター 紀要 第3号』参照
- 3) 詳しくは若松(1995)「 」『中国帰国者定着促進センター 紀要 第3号』
- 4) 日本人と接することを通してコミュニケーションに対する柔軟な姿勢を築き、身近な話題でコミュニケーションできるようになることを目標とした授業。必要最少の単語や表現、コミュニケーションストラテジーを有効に使い、教師や日本人ボランティアとより自然な形で話をする。特定の話題を提起して行うので、その話題に関する単語をいくらか知っている方が進めやすい。
- 5) 促音、撥音、長音は独立した音節としないで数える。  
例えば、「にっぽん」は2音節、「さとう」は2音節と数える。
- 6) 注2)のテストと同じ。
- 7) 1966年から10年にわたった大規模な政治運動。社会は混乱しており、この時期に学齢期を過ごした学習者は実際には学校で授業は行われていなかったといっている。

資料1

1. みかん



2. りんご



3. 桃 (もも)



4. バナナ (はなな)



5. 西瓜 (すいか)



- 1 -

資料2

1. 朝 (あさ)



あ

2. 椅子 (いす)



い

3. うち家 (うち)



う

4. 駅 (えき)



え

5. お金 (おかね)



お

資料3 「50音順」用 50音図

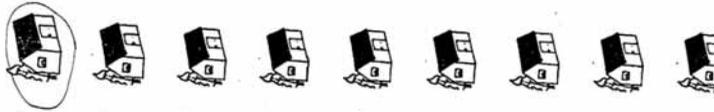
あ 	い 	う 	え 	お 
か 	き 	く 	け 	こ 
さ 	し 	す 	せ 	そ 
た 	ち 	つ 	て 	と 
な 	に 	ぬ 	ね 	の 
は 	ひ 	ふ 	へ 	ほ 
ま 	み 	む 	め 	も 
や 		ゆ 		よ 
ら 	り 	る 	れ 	ろ 
わ 				ん 

文字聞き書き あ行

氏名( )

例)	あ	い	う	え	お
1)	あ	い	う	え	お
2)	あ	い	う	え	お
3)	あ	い	う	え	お
4)	あ	い	う	え	お
5)	あ	い	う	え	お
6)	あ	い	う	え	お
7)	あ	い	う	え	お
8)	あ	い	う	え	お
9)	あ	い	う	え	お
10)	あ	い	う	え	お

資料5



資料4